教員からのメッセージ

“おススメ”をお勧めしない

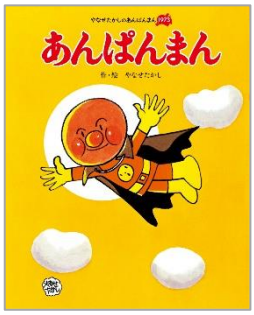
社会福祉学科助教

尾崎　麻理
OZAKI　MARI

本との出会いかたは、さまざまである。学校の廊下に掲示されたポスター、学校推薦図書、とある新聞の書籍ページ、書店のポップアップ、教師や知人からのおススメ、大好きな芸能人からのおススメ、等々、情報発信はあらゆるところに存在する。さらにコロナ禍の副産物として、インターネットが日常となり、老若男女問わず、誰でも情報を受け取ることができるようになった。羨ましいかぎりである。

私が小学生のころの話である。夏休み読書感想文を書くために学校の図書室で本を探した。廊下のポスターでもなく、夏休み推薦図書一覧でもなく、自分が読みたい本を探して、図書室の中をぐるぐる歩き回った記憶がある。そして、ようやく興味を持った本は、字が少なく、絵が沢山入っている「絵本」であった。残念ながら、学校からの推薦図書一覧にはなかった。本の内容は、主人公が、美味しい餡子が入った頭の一部を分けて、困っている人を助けるという話だった。子どもながらに、自己犠牲とは何だろうかと考えさせられた衝撃の本だった。そして、最高傑作の読書感想文を書いた。自信満々に、目をきらきらさせながら、担任の先生に渡したことを覚えている。しかし、その先生の一言はさらに衝撃だった。「アンパンマンか、これは読書感想文としてはどうかなあ、書き直して持ってきなさい」だった。小学生の私は、この本の素晴らしさが伝わらないもどかしさと悔しさが入り混じった感情を抱いた。

インターネットからの情報量は、誰かのおススメだけではなく、時には自分のちょっとした関心Wordをエッセンスにして、偏った情報量に変化していく傾向があると、最近感じている。自分が読みたい本が何処にあるのかは、図書館の一つのコーナーだけとは限らない。図書館全体を広い視野を持って探す面白さにも出会ってほしいと思う。どんな本であっても、読み手の心に突き刺さる本が、いいと思う。もちろん、誰かのおススメがあなたのお薦め本になることもあるだろう。ただ、図書館を利用する皆さんには、それだけにとらわれない、自分の感性に突き刺さる一冊を広い視野で是非見つけてほしいと思う。新しい本との出会いは、ワクワクするものである。だからこそ、自分が自分にススメたい本を探してほしいと思う。



『あんぱんまん』新装版
やなせたかし作・絵
フレーベル館
726.6||Y56